

二段

むかし、おとこ、うぬかづぶりして、
ならの京かすかのさとに、しる
よしゝてかりにいにけり、その
さとに、いとなまめいたるをんな
はらからすみけり、このおとこ、
かいまみてけり、おもほえず、ふる
さとにいとはしたなくてありけ
れは、こゝちまとひにけり、おとこの

きたりけるかりきぬのすそを
きりて、うたをかきてやる、そのお
とこ、しのぶすりのかりきぬをな
むきたりける、

一

新古今

かすかのゝわかむらさきのすり衣
しのぶのみたれかきりしられす
となむ、をいつきていひやりける、
ついてももしろきことゝもや思けん、

二

古今

みちのくの忍もちすりたれゆへに
みたれそめにし我ならなくに

といふうたの心はへなり、むかし人
は、かくいちはやきみやひをなん
しける、

河原大臣哥也

廿五日

左大臣源融、寛平七年八月薨七十三

於在中将非幾先達如何

二段

むかし、おとこ有けり、ならの京は
はなれ、この京は人の家また
さたまらさりける時に、ゝしの京
に女ありけり、その女、世人にはま
されりけり、その人、かたちよりは心なん

まさりたりける、ひとりのみもあら
さりけらし、それをかのみめをと
こ、うちものかたらひて、かへりきて、

いかゝ思ひけん、時はやよひのついたち、
あめそをふるにやりける、

3

古今

おきませすねもせてよるをおあかしては

春の物とてなかくめくらしつ

〔三段〕

むかし、おとこありけり、けさうし
ける女のもとに、ひしきもといふ
ものをやるとて、

4

思ひあらはむくらのやとにねもしなん

ひしきものにはそてをしつゝも

二条のきさきのまたみかとも

つかまつりたまはて、たゝ人にて

おはしましける時のこと也、

〔四段〕

むかし、ひんかしの五条に、おほぎ

さいの宮おはしましけるにし

のたいに、すむ人有けり、それ

を、ほいにはあらて心さしふかゝりける

ひと、ゆきとふらひけるを、む月の
十日はかりのほどに、ほかにかくれ
にけり、ありところはきけと、人の
いきかよふへき所にもあらさりけ
れは、猶うしと思ひつゝなんあり
ける、又のとじのむ月に、むめの
花さかりに、こそをこひていき
て、たちて見、みて見、見れと、こそに
なるへくもあらず、うちなきて、あはら
なるいたしきに月のかたふくまで

ふせりて、こそを思いてゝよめる、

5

古今

月やあらぬ春や昔のはるならぬ

わか身ひとしはもとの身にじて

とよみて、夜のほのほのとあくるに、

なくなかくへりにけり

〔五段〕

むかし、おとこ有けり、ひんかしの五条

わたりに、いとしのひていきけり、
みそかなる所なれはかとよりも、
えいらて、わらはへのふみあけたる
ついひちのくつれよりかよひけり、

ひとしけくもあらねと、たひかさなり
ければ、あるしきゝつけて、その
かよひ地に、夜ことに人をすへて

イ無多本

まもらせければ、いけともえあは
てかへりけり、さてよめる、

9

古今

ひとしれぬわかゝよひちのせきもりは

よひよひことにうちもねなゝん

とよめりければ、いといたう心や

みけり、あるしゆるしてけり

二祭のきさきにしのひてまいりけるを、

世のきこえありければ、せうとたちの
まもらせたまひけるとぞ、

二六段

むかし、おとこありけり、女のえつま
しかりけるを、としをへてよはひわ
たりけるを、からうしてぬすみいてゝ、
いとくらきにきけり、あくたかはと
いふ河をゐていきければ、草の
うへにをきたりけるつゆを、かれは
なにそとなんおとこにとひける、

ゆくさきおほく夜もふけにけれ
は、おにある所ともしらて、神さへ
いとみしうなり、あめもいたう
ふりければ、あはらなるくらに
女をおくにをしいれて、おとこ、
ゆみやなくひをおひてとくちに
をり、はや夜もあけなんと思つゝ
ゐたりけるに、おにはやひとくちに
くひてけり、あなやといひけれと、
神なるさはきにえきかさりけり、

やうやう夜もあけゆくに、見れは
ゐてこし女もなし、あしすり

をしなければもかひなし、

7

しらたまかなにそと人のとひし時
つゆとこたへてきえなましものを

高子 元慶元年正月為中宮 六

これは二条のきさきの、いとこの女御
の御もとにつかうまつるやうにてゐた
まへりけるを、かたちのいとめてたく
おはしければ、ぬすみておひて

昭宣公

いてたりけるを、御せうとほりかはの
おとゝ、たらづくにつねの大納言、ま
た下らうにて内へまいりたまふに、
いみしうなく人あるをきゝつけて、
とゝめてとりかへしたまつてけり、
それをかくおにとはいふなりけり、
またいとわかうて、きさきのたゝに
おはしける時とや、

〔七段〕

むかし、おとこありけり、京にありわひて

あつまにいきけるに、いせ、おはり
のあはひのうみつらをゆくに、浪
のいとしろくたつを見て、

8

後撰

いとゝしくすきゆくかたのこひしきに
うら山しくもかへるなみかな
となむよめりける、

〔八段〕

むかし、おとこ有けり、京やすみつか
りけん、あつまの方にゆきてすみ
所もとむとて、ともとする人ひとり

ふたりしてゆきけり、しなのゝくに、
あさまのたけにけふりのたつを見て、

6

新古今

しなのなるあさまのたけにたつ煙
をちこち人の見やはとかめぬ

〔九段〕

むかし、おとこありけり、そのおとこ、身を

えうなき物に思なして、京には
あらし、あつまの方にすむへき
くにもとめにとてゆきけり、もと
より友とする人ひとりふたりして
いきけり、みちしれる人もなくて、

まとひいきけり、みかはのくにやつは
しといふ所にいたりぬ、そこをやつは
しといひけるは、水ゆく河のくもて
なれば、はしをやつわたせるによりて

はイ

なむ、やつはしといひける、そのさはの
ほとりの木のかけにおりゐて、かれ
いひくひけり、そのさはにかきつはた
いとおもしろくさきたり、それを
見て、ある人のいはく、かきつはた

といふいつもしをくのかみにすへて、
たひの心をよめといひければ、よめる、

10

古今

から衣きつゝなれにしつましあれは

はるはるきぬるたひをしそ思

とよめりければ、みな人、かれいひの
うへになみたおとしてほとひにけり、
ゆきゆきてするかくのくにいたりぬ、
うつの山にいたりて、わかいらむと
するみちはいとくらうほそきに、
つたかえてはしけり、物心ほそく、

すゝるなるめを見ることゝ思ふに、
す行者あひたり、かかるみちはいかて
かいまするといふを見れば、見し
ひとりなりけり、京に、その人の御もと
にとて、ふみかきてつく、

11

新古今

するかなるうつの山へのうつゝにも

ゆめにも人にあはぬなりけり

ふしの山を見れば、さ月のつこも
りに、雪いとじろうつふれり、

時しらぬ山はふしのねいつとてか
かのこまたらにゆきのふるらん

その山は、こゝにたとへは、ひえの山
をはたちはかりかさねあけたらん

或説云、塩尻壺塩といふ物あり、其尻似此山、此語之習故
好卑詞、寂蓮殊信用此説或本はしりほしの

ほとして、なりはしほしりのやう

になんありける 先人命、縦雖為塩事、凡卑也、
不可用之心えすとてありなん

往年有尋問人、答 不知由云々

猶ゆきゆきて、武蔵のくにとしもつぶさ、

いと

のくにとの中に、おほきなる河あり

それをすみた河といふ、その河の

ほとりにむれあて、おもひやれは、

かきりなくとをくもきにけるかな

とわひあへるに、わたしもり、はやふ

ねにのれ、日もくれぬといふに、のり

てわたらんとするに、みな人物わひ

しくて、京に思ふ人なきにしも

あらず、さるおりしも、しろきとりの

はしとあしとあかき、しきのおほ

きさなる、みつのうへにあそひつゝ

いをくくふ、京には見えぬとりなれば、

みな人見しらす、わたしもりにとひ

ければ、これなん宮ことりといふを

きゝて、

13

古今

名にしおはゝいさ事とはむ宮こ鳥

わかおもふ人はありやなしやと

とよめりければ、舟こそりてなきにけり、

二〇段

むかし、おとこ、武蔵のくにまでまとひ

ありきけり、さて、そのくにゝある女を

よはひけり、ちゝはこと人に

あはせむといひけるを、はゝなんあて

なる人に心つたりける、ちゝは

なおひとにて、はゝなんふちはら

なりける、さてなんあてなる人にと
思ひける、このむこかねによみてをこせ
たりける、すむ所なむ、いるまのこほり
みよしのゝさとなりける、

14

みよしのゝたのむのかりもひたふるに
きみかゝたにそよるとなくなる
むこかね、返し、

15

わか方によるとなくなるみよしのゝ
たのむのかりをいつかわすれん
となむ、人のくにゝても、猶かゝること
なんやまさりける、

〔一段〕

昔おとこ、あつまへゆきけるに、友
たちともに、みちよりいひをこせける、

16

拾遺

わするなよほとは雲るになりぬとも
そらゆく月のめくりあふまで

〔二段〕

むかし、おとこ有けり、人のむすめを
ぬすみて、むさしのへゐてゆくほとに、

ぬす人なりければ、くにかみから
められにけり、女をはくさむらの
なかにをきてにけにけり、みちくる
ひと、この野はぬす人あなりとて、
火つけむとす、女わひて、

17

古今

むさしのはけふはなやきそわかくさの

カスカノ

つまもこもれりわれもこもれり
とよみけるをきゝて、女をはとりて、
ともゐていにけり、

〔三段〕

昔、武蔵なるおとこ、京なる女のもとに、
きこゆればゝつかし、きこえねはくる
しとかきて、うはかきに、むさしあふ
みとかきてをこせてのち、をともせず

なりにければ、京より女、

18

むさしあふみさすかにかけてたのむには
とはぬもつらしとふもつるさし

とあるを見てなむ、たへかたき心
地しける、

19

とへはいふとはねはつらむとさしあふみ

かゝるおりにやひとはしぬらん

〔二四段〕

むかし、おとこ、みちのくにすゝるに
ゆきいたりにけり、そこなる女、京の
ひとはめつらかにやおほえけん、
せちにおもへる心なんありける、さて、
かの女、

20

入万葉

桑子 蚕也

中々に恋にしなすはくはこにそ
なるへかりけるたまのをはかり
うたさへそひなひたりける、さす
かにあはれとやおもひけん、いきて

ねにけり、夜ふかくいてにければ、女、

21

東国之習家ヲクタト云

夜もあけはきつにはめなて
くたかけのまたきになきて

家鶏也

せなをやりつる

といへるに、おとこ、京へなんまかるとて、

22

わ一本 ね

くりはらのあれはの松の人ならば
みやこのつとにいさといはましを
といへりければ、よろこほひて
おもひけらしとそいひをりける、

〔二五段〕

むかし、みちのくにゝて、なてうことな
き人のめにかよひけるに、あやしう
さやうにてあるへき女ともあらず

見えければ、

23

しのふ山しのひてかよふ道も哉
人の心のおくも見るへく

女、かきりなくめてたしとおもへと、
さるさかなきえひすこゝろを見
ては、いかゞはせんは

〔二六段〕

むかし、きのありつねといふ人有けり、
み世のみかにつかうまつりて、時に
あひけれと、のちは世かはり時うつり
にければ、世のつねの人のこともあらず
人からは、心うつくしくあてはかなる
ことをこのみて、こと人にもにす、
まつしくへても、猶むかしよかりし
時の心ながら、よのつねのこともしらす、
としこゝろあひなれたるめ、やうやう
とこはなれて、つるにあまに

なりて、あねのさきたちてなりたる
とこゝろ入ゆくを、おとこ、まことにむつ
ましきことこそなかりけれ、いまはと
ゆくを、いとあはれと思けれと、まつし
ければするわさもなかりけり、
おもひわひて、ねむこゝろにあひかたら
ひけるともたちのもとに、かうかついま
はとてまかるを、なにことも、いざゝか
なることもえせて、つかはすことゝ
かきて、おくだ、

24

手をとりてあひ見し事をかそふれは
とおとといひつゝよつはへにけり
かのもたちこれを見て、いとあは
れと思ひて、よるの物までをくりてよめる

25

年たにもとおとてよつはへにけるを
いくたひきみをたのみきぬらん
かくいひやりたりければ、

26

これやこのあまのは衣む入しこそ
きみかみけしとたてまつりけれ

よるこひにたへて、又、

27

秋やくるつゆやまかふとおもふまで
あるは涙のふるにそ有ける

〔二七段〕

年ころをとつれさりける人の、さ
くらのさかりに見にきたりければ、
あるし、

28

古今

あたなりとなにこそたてれ桜花
年にまれなる人もまちけり

返し、

29

古今

けふこすはあすは雪とそふりなまし
きえすはありとも花と見ましや

〔二八段〕

むかし、なま心ある女ありけり、お
とちかう有けり、女、うたよむ人
なりければ、心見むとて、きくの花の
うつる入るをとりて、おとこのもとへやる、

30

紅に、ほふはいつらの白雪の
枝もとを、にふるかとも見ゆ
おとこ、しらすよみによみける、

31

紅に、ほふかうへのしらすきくは
おりける人のそてかとも見ゆ

〔二九段〕

昔、おとこ、宮つかへしける女の方に、
こたちなりける人をあひしりたり
ける、ほともなくかれにけり、おなし
ところなれば、女のめには見ゆる物
から、おとこはある物かとも思たらず、
女、

32

古今

あま雲のよそにも人のなりゆくか
さすかにめには見ゆる物から

とよめりければ、おとこ、返し、

33

古今ゆきかへり

あまくものよそにのみしてふることは

わかある山の風はやみ也

とよめりけるは、又おとこある人と
なんいひける、

二〇段]

むかし、おとこ、やまとにある女を

見て、よはひてあひにけり、さて

ほとへて、宮つかへする人なりけ

れは、かへりくるみちに、やよひはかりに、

かえてのもみちのいとおもしろき

をとりて、女のもとにみちよりいひやる、

34

君かためたおれる枝は春なから

かくこそ秋のもみちしにけれ

とてやりたりければ、返事は京

にきつきてなんもてきたりける、

35

いつのまにうつるふ色のつきぬらん

きみかさとは春なかるらし

二二段]

むかし、おとこ女、いとかしこく思ひ

かはしてこと心なかりけり、さるを、

いかなる事ありけむ、いさゝかなる

ことにつけて、世中をうしと思ひ

て、いてゝいなんと思ひて、かゝるうたを

なんよみて、物にかきつけゝる、

36

いてゝいなは心かるしといひやせん

世のありさまを人はしらねは

とよみをきて、いてゝいにけり、この

女かくかきをきたるを、けしう、心

をくへきこともおほえぬを、

なにゝよりてかかゝらむと、いといたう

なきて、いつかたにもとめゆかむと

かとにいてゝ、と見かう見ゝけれど、

いつこをはかりともおほえさり

ければ、かへりいりて、

37

思ふかひなき世なりけり年月を
あたにちきりて我やすまひし
といひてなかめをり、

38

人はいさ思ひやすらん玉かつら
おもかけにのみいと見えつゝ

この女いとひさしくありて、ねむし
わひてにやありけん、いひをこせたる、

39

今はとてわするゝ草のたねをたに
ひとの心にまかせずも哉

返し

40

忘草つふとたにぎく物ならば
思けりとはしりもしなまし

又又、ありしよりけにいひかはして、おとこ、

41

新古今

わする覽と思心のうたかひに
ありしよりけに物そかなしき

返し、

42

新古今

中そらにたちあるくものあともなく

身のはかなくもなりにける哉

とはいひけれと、をのか世ゝになり

にければ、うとくなりけり、

二三「段」

むかし、はかなくてたえにける

なか、猶やわすれさりけん、女の

もとより、

43

新古今

うきながら人をはえしもわすれねは

かつつらみつゝ猶そこひしき

といへりければ、されはよといひて、

おとこ、

44

あひ見ては心ひとつをかはしまの

水のなかれてたえしと思
とほいひけれど、その夜にけり、
いじくゆくさきのことゝもなとらひて、

45

秋の夜のちよをひとよになすら入て
やちよしねはやあく時のあらん

返し、

46

秋の夜のちよをひとよになせりとも
ことはのこりてとりやなきなん
いにしへよりもあはれにてなむかよひける、

〔三段〕

むかし、ゐなかわたらひしける人
の子とも、井のもとにいてゝあそひ
けるを、おとなになりにつれば

おとこも女も

はちかはしてありけれど、おとこは
この女をこそえめとおもふ、女は
このおとこをとおもひつゝおやの

あはすれとも、きかてなんありける、
ぞて、このとなりのおとこのもとより
かくなさ、

47

つゝゐつゝのゐつゝにかけしまるかたけ
すきにけらしな見ざるまに

女、返し、

48

くらへこしふりわけかみもかたすぎぬ
きみならすしてたれがあく入き
なとらひひひて、つゐにほいのことゝ
あひにけり、

さて、年ころふるほとに、女、おやなく
たよりなくなるまゝに、もろとも
いふかひなくてあらんやはとて、
かうちのくにたかやすのこほりじ、
いきかよふ所いてきにけり、さし
けれど、このもとの女、あしとおも入る
けしきもなくていたしやりければ、
おとこ、ゝと心ありてかゝるにやあら
むと思ひうたかひて、せんさいの中に

かくれるて、かうちへいぬるかほにて
見れば、この女いとようけさう
して、うちなかめて、

49

古今

風ふけはおきつしら浪たつた山
夜はにや君かひとりこゆらん
とよみけるをきゝて、かきりなく
かなしと思ひて、河内へもいかすなりにけり、まれまれのたかやすにぎ
て見れば、はしめこそ心にくも
つくりけれ、いまはうちとけて、

てつからいるかひとりて、けこのつつわ
物にもりけるを見て、心うかりていか
すなりにけり、さりければ、かの女
やまとの方を見やりて、

50

新古今

君かあたり見つゝをくらんいこま山
くもなかくしそ雨はふるとも
といひて見いたすに、からうして
やまと人こむといへり、よろこひてま
つに、たひたひすきぬれば、

51

君こむといひし夜ことにすきぬれば

たのまぬ物のこひつゝそふる
といひけれと、おとこすますなりにけり、
〔三四段〕
むかし、おとこ、かたあなかにすみけり、
おとこ、宮つかへしにとて、わかれお
しみてゆきにけるまゝに、三とせ
こざりければ、まちわひたりけるに、
いとねむころにいひける人に、こよひ
あはむとちきりたりけるに、この
おとこきたりけり、このとあけたまへと

たゝきけれと、あけてうたをなん
よみていたしたりける、

52

あらたまの年のみとせをまちわひて

たゞこよひこそにるまくらすれ
とひひいたしたりければ、

53

あつさゆみ弓つき弓年を入れて
わかせしかことつるはしみせよ
とひひて、いなむとしければ、女、

54

あつさ弓ひけとひかねと昔より
心はきみによりにし物を

といひければ、おとこかへりにけり、女、いと
かなしくて、しりにたちてをひゆけと、
えをいつかて、し水のある所にふ
しにけり、そとなりけるいはに、お
よひのちしてかきつけゝる、

55

あひおもはてかれぬる人をとゞめかね
わか身は今そきえはてぬめる

とかきて、そこにいたつらになりにけり、

〔二五段〕

むかし、おとこ有けり、あはしともいは
さりける女のさすかなりけるかもとに、

いひやりける、

56

古今

秋のゝにさゝわけしあさの袖よりも

あはてぬる夜そひちまさりける

色このみなる女、返し、

57

古今

小町

見るめなきわか身をうらとしらねはち

かねてあまのあしたゆくゝる

〔二六段〕

むかし、おとこ、五条わたりなりける

女をえゝすなりにけることゝ、わひ

たりける人の返ことに、

58

新古今

一本なみた

らし

おもほえず袖にみなのさはく哉

もろこし舟のよりし許に

〔二七段〕

昔、おとこ、女のもとにひと夜いきて、
又もいかすなりにければ、女の手
あらふ所にぬきすをうちやりて、
たらひのかけに見えけるを、みつから、

59

我許物思人は又もあらし

とおもへは水のしたにも有けり

とよむを、こさりけるおとこ、たちきくて、

60

みなくちに我や見ゆらんかはつさへ

水のしたにてもろこ糸になく

〔二八段〕

昔、いるこのみなりける女、いてゝいにければ

61

なとてかくあふこかたみになりけん

水もらさしとむすひしものを

貞観十一年二月貞明親王為皇太子、于時高子為女御、

依春宮母儀号也去年十二月廿六日誕生、高子年廿七

〔二九段〕

むかし、春宮の女御の御方の花の

賀にめしあつけられたりけるに、

62

新古今

花にあかぬなけきはいつもせしかとも

けふのこよひにゝる時はなし

〔三〇段〕

むかし、おとこ、はつかなりける女のもとに

63

あふことはたまのを許おもほえて

つらき心のなかく見ゆらん

〔三一段〕

昔、宮の内にて、あるこたちのつほねの

まへをわたりけるに、なにのあた

にか思けん、よしやくさ葉よならん

ぞか見むといふ、おとこ、

64

つももなき人をつけへは忘草

をのかつへにそおふといふなる

といふを、ねたむ女もありけり、

〔三二段〕

むかし、物いひける女に、年ころありて、

65

古今

無作者

いにしへのしつのをたまきくりか
へし

むかしを今になすよしも哉

といへりけれと、なにともおもはずや

ありけん、

〔三三段〕

むかし、おとこ、つづくにむはらのこほりに

かよひける、女、このたひいきては又は

こしとおもへるけしきなれば、おとこ、

66

万葉

上句

あしへよりみちくるしほのいやましに

君に心を思ます哉

返し、

67

こもり江に思ふ心をいかてかは

舟さすさほのさしてしるへき

みなか人の事にては、よしやあしや、

〔三四段〕

むかし、おとこ、つれなかりける人のもとに、

68

いへはえにいねはむねにさはかれて

心ひとつになけくころ哉

おもなくていへるなるへし、

〔三五段〕

むかし、心にもあらたえたる人のもとに、

69

玉のをゝあはおによりてむすへれば

たえてのゝちもあはむとぞ思

〔三六段〕

昔、わすれぬるなめりとゝひことしける

女のもとに、

70

谷せはみ峯までは入る玉かつら

たえむと人にわかおもはなくに

〔三七段〕

昔、おとこ、色このみなりける女に
あへりけり、うしろめたくや思けん、
71

我ならてしたひもとくなあさかほの
ゆふかけまたぬ花にはありとも

返し、

72

ふたりしてむすひしひもをひとりして
あひ見るまてはとかしと思

〔三八段〕

むかし、きのありつねかりにいきたるに、

ありきてをそくきけるに、よみて
やりける、

73

君により思ならひぬ世中の
人はこれをやこひといふらん

返し、

74

ならばねは世の人ことになにをかも
恋とはいふと、ひし我しも

〔三九段〕

淳和天皇

むかし、西院のみかと、申すみかとお
はしましけり、そのみかとのみこ、

崇子内親王母橘船子正四上清野女承和十五年五月十五日

薨

たかいこと申すいまそかりけり、

そのみこうせ給て、おほんはふりの
夜、その宮のとなりなりけるおとこ、
御はふり見むとて、女くるまにあひ
のりていてたりけり、いとひさしう
ゐていてたてまつらす、うちなきて
やみぬへかりけるあひたに、あめの
したの色このみ、源のいたるといふ人、
これもゝの見るに、このくるまを女
くるまと見て、よりきてとかくなまめ
くあひたに、かのいたる、ほたるを

とりて女のくるまにいれたりける
を、くるまなりける人、このほたるの

ともす火にや見ゆらん、ともしけち
なむするとて、のれるおとこのよめる、

75

いてゝいなはかぎりなるへみともしけち
年へぬるかたなくこゑをきけ
かのいたる、返し、

76

いとあはれなくそきこゆるともしけち
きゆる物とも我はしらすな
あめのしたの色このみのうたにては、
猶そありける、

いたるはしたかふかおほち也、みこの
ほいなし、

〔四〇段〕

昔、わかきおとこ、けしうはあらぬ女
を思ひけり、さかしらするおやあ
りて、思ひもそつくとて、この女をほ
かへをひやらむとす、さこそいへ、また
をいやらす、人のこなれは、また心
いきおひなかりければ、とゝむるいき
おひなし、女もいやしければすま
ふちからなし、さるあひたに、

おもひはいやまさりにまさる、には
かにおやこの女をゝひうつゝ、おとこ、
ちのなみたをなかせとも、とゝむる
よしなし、ゐていてゝいぬ、おとこ、なくな
く
よめる

77

いてゝいなは誰か別のかたからん
ありしにまさるけふはかなしも
とよみてたえいりにけり、おやあはて
にけり、猶思ひてこそいひしか、いと
かくしもあらしとおもふに、しんし
ちにたえいりにければ、まとひて

願たてけり、けふのいりあひ許
にたえいりて、又の日のいぬの時はかりに
なん、からうしていきいてたりける、
むかしのわか人は、さるすける物
思ひをなんしける、いまのおきな
まさにしなむや、

〔四一段〕

昔、女はらからふたりありけり、
ひとりはいやしきおとこのまつしぎ、
ひとりはあるおとこもたりけり、
いやしきおとこもたる、しはすのつこ

もりに、うへのきぬをあらひて、よつから
はりけり、心ざしはいたしけれと、
さるいやしきわさもならはさり
ければ、うへのきぬのかたをはりや
りてけり、せむ方もなくて、たよなきに
なきけり、これをかのあてなるお
とこぎよて、いと心くるしかりければ、いと
きよなるるつさつうへのきぬを
見てよちやるとて、

78

古今

むらさぎの色こぎ時はめもはるこ

野なる草木そわかれさりける

むさしのく心なるへし、

〔四二段〕

昔、おとこ、色このみとしるしる、女をあひ
いへりけり、されとにくよはたあらさり
けり、しはしはいきけれと、猶いとつし
るめたく、さりとて、いかてはたえある
ましかりけり、なをはたえあらさり
けるなかりければ、ふつかみか許
さることありて、えいかてかくなん、

79

新古今

いてよこしあとたにいまたかはらしを

たかよひちと今はなるらん

ものつたかはしさによめるなりけり

〔四三段〕

むかし、かやのみこと申すみこおはし

賀陽親王、桓武第七、母夫人多治比氏、三品治部卿

貞観十三年十月八日薨、七十八

ましけり、そのみこ、女をおほしめして、
いとかしこうめくみつかつたまひける
を、人なまめきてありけるを、我の
みと思ひけるを、又人きよつけて、ふ

みやる、ほとゝきすのかたをかきて、

80

古今

ほとゝきすななくさとのあまた

汝也

あれは

猶うとまれぬ思ものから

といへり、この女、けしきをとりにて、

81

名のみたつしてのたおさはけさそなく

いほりあまたとつとまれぬれは

時はさ月になんありける、おとこ、返し、

82

いほりおほきしてのたをさは猶たのむ

わかすむさとにこゑしたえすは

〔四四段〕

むかしあかたへゆく人に、むまのはな

むけせむとて、よひて、うとき人にし

あらざりければいゑとつし

さかつきさゝせて、女のさうそくかつけん

す、あるしのおとこ、うたよみて、もの

こしにゆひつけさす、

83

いてゝゆく君かためにとぬきつれば

我さへもなくなりぬへきかな

このうたはあるかなかにおもし

るければ、心とゝめてよます、はらに

あちはひて、

〔四五段〕

むかし、おとこ有けり、人のむすめの

かしつく、いかてこのおとこに物いはむと

思けり、うちいてむことかたくやあり

けむ、物やみになりてしぬへき時に、

かくこそ思しかといひけるを、おや

きゝつけて、なくなかつけたりければ、

まとひきたりければ、しにければ、つれつれ

とこもりをりけり、時はみな月の

つこもり、いとあつきころをひに、

よるはあそひをりて、夜ふけて、

やゝすゝしき風ぶきけり、ほたる

たかくとひあかる、このおとこ、見

ふせりて、

84

後撰

ゆくほたる雲のつゝ入までいぬへくは
秋風ふくとかりにつけこそ

85

くれかたき夏のひくらしなかわれは
そのことゝなく物そかなしき

〔四六段〕

むかし、おとこ、いとづるはしき友あり
けり、かた時さらすあひ思ひけるを、
人のくにへいきけるを、いとあはれと
おもひてわかれにけり、月日へてをこ
せたるふみに、あさましくたいめん

せて、月日のへにけること、

わすれやし給にけんと、いたく思ひ

わひてなむ侍、世中の人の心は、

めかるれはわすれぬへき物にこそ

あめれといへりければ、よみてやる、

86

めかるともおもほえなくにわすらるゝ
時しなればおもかけにたつ

〔四七段〕

むかし、おとこ、ねんころにいかでと思

女有けり、されとおとこをあたな

りとぎゝて、つれなさのみまさりつゝいへる、

87

古今

おほぬさのひくてあまたになりぬれは
思へとえこそたのまさりけれ

返し、おとこ、

88

古今

おほぬさと名にこそたてれ流ても
つゝによるせはありといふ物を

〔四八段〕

昔、おとこ有けり、むまのはなむけ

せんとて、人をまちけるに、こさりければ、

89

古今

今そしるくるしき物と人またむ
さとをはかれすとふへかりけり

〔四九段〕

むかし、おとこ、いもうとのいとおかし
けなりけるを見をりて、

90

うらわかみねよけに見ゆるわか草を
ひとのむすはむことをしそ思

ときこえけり、返し、

91

はつ草のなとめつらしきことのはそ
うらなく物を思ける哉

〔五〇段〕

昔、おとこ有けり、うらむる人をうらみて、

92

鳥のこをとをつゝとをはかさぬとも
おもはぬ人をおもふものは

といへりければ、

93

あさつゆはきえのこりてもありぬへし

たれかこの世をたのみはつへき

又、おとこ、

94

吹風にこそその桜はちらすとも

あなたのみかた人の心は

又、女、返し、

95

古今

無作者

ゆく水にかすかくよりもはかなきは

おもはぬ人を思ふなりけり

又、おとこ、

96

ゆくみつとすくるよはひとちる花と

いつれまでふことをきくらん

あたくらへかたみにしけるおとこ女の、

しのひありきしけることなるへし、

〔五一〕

昔、おとこ、人のせんさいにきくつへ
けるに、

うへしうへは秋なき時やさかさらん
花こそちらめねさへかれめや

〔五二段〕

むかし、おとこありけり、人のもとより

ない無此字

かさなりちまきをこせたりける返事に、

98

あやめかり君はぬまにそまとひける

我は野にいてゝかるそわひしき

とて、きしをなむやりける、

〔五三段〕

むかし、おとこ、あひかたき女にあひて、

物かたりなとするほとに、鳥のなきければ、

99

いかてかは鳥のなく覧人しれす

思ふ心はまたよふかきに

〔五四段〕

昔、おとこ、つれなかりける女にいひやりける、

100

とるゝ

行やらぬ夢地をたのむたもとは

あまつそらなるつゆやをくらん

〔五五段〕

むかし、おとこ、思かけたる女の、えうまし

うなりての世に、

101

おもはずはありもすらめと事のはの

をりふしことにたのまるゝ哉

〔五六段〕

むかし、おとこ、ふして思ひ、おきて思ひ、

思ひあまりて、

102

わかそては草の庵にあらねとも

くるれはつゆのやとりなりけり

〔五七段〕

昔、おとこ、人しれぬ物思ひけり、つれなき

人のもとに、

103

こひわひぬあまのかるもにやとるてふ

我から身をもくたきつる哉

〔五八段〕

むかし、心つきて色このみなるおとこ、
なかをかといふ所に家つくりてをりけり、

そのとなりなりける宮はらに、いと
もなき女ともの、ゐなかなりければ、
田からんとて、このおとこのあるを見て、
いみしのすき物のしわざとて、

あつまりていりきければ、このおとこ、
にけておくにかくれにければ、女、

104

古今

あれにけりあはれいく世のやとなれや
すみけんひとのをとつれもせぬ

といひて、この宮にあつまりきて
ありければ、このおとこ、

105

むくからおひてあれたるやとのつれたきは
かりにもおにのすたくなりけり

とてなむいたしたりける、この女とも、ほ
ひろはむといひければ、

106

うちわひておちひろふときかませは
我も田つらにゆかましものを

〔五九段〕

むかし、おとこ、京をいかゝ思ひけん、ひむ
かし山にすまむと思ひいりて、

107

後撰

すみわひぬ今はかきりと山さとに
身をかくすへきやともとめてん

夕

かくて物いたくちみてしにいりにけり

ければ、おもてに水そゝきなとして、
いきこてゝ、

108

古今

無作者

わかう入に露そをくなるあまの河

とわたるふねのかいのしづくか
となむいひて、いきいてたりける、

〔六〇段〕

むかし、おとこ有けり、宮つかへいそ
かしく、心もまめならざりけるほどの
いへとうし、まめにおもはむといふ人
につきて、人のくへいにけり、このおとこ、

宇佐の使にていきけるに、あるくにの

祇承

しそつゝの官人のめにてなむあると
きゝて、をんなあるしにかはらけとら
せよ、さらすはのましといひければ、
かはらけとりていたしたりけるに
さかなゝりけるたちはなをととりて、

109

古今

無作者

さ月まつ花たちはなのかをかけは
むかしの人のそてのかそする
といひけるにそ思ひいてゝ、あまに
なりて、山にいりてそありける、

〔六一段〕

昔、おとこ、つくしまていきたりける
に、これは、色このむといふすき物と、
すたれのうちなる人のいひけるを
きゝて、

110

拾遺

そめ河をわたらむ人のいかてかは
色になるてふことのなからん

女、返し、

111

後撰

名にしおはゝあたにそあるへきたは
れしま

浪のぬれきぬきるといふなり

〔六二段〕

むかし、年ころをとつれざりける女、心
かしこくちあらざりけん、

はかなき人の事につきて、人の

くになりける人につかはれて、もと
見し人のまへにいてきて物くはせ
なとしけり、よさり、このありつる人
たまへとあるしにいひければ、をこ

しるゝ

せたりけり、おとこ、我をはしらすやとて、

112

いにしへのにほひはいつらさくら花

こけるからともなりにける哉

といふを、いとつかしと思ていらへも
せてあたるを、なといらへもせぬと

いへは、なみたのこほるゝにめも見え
す、ものもいはれすといふ、

113

これやこの我にあふみをのかれつゝ

みイ

年月ふれとまさりかほなき

といひて、きぬゝきてとらせけれと、

すてゝにけにけり、いつちいぬらんとも
しらす、

〔六三段〕

むかし、世こゝろつける女、いかて心

なさけあらむおとこにあひえてし

かなとおもへと、いひいてむもたよりなさに、

まことならぬ夢かたりをす、子三

人をよひてかたりけり、ふたりの

こはなさけなくいらへてやみぬ、

さふらつなりける子なん、よき

御をとこそいてこむとあはするに、

この女、けしきいとよし、こと人は

いとなさけなし、いかてこの在五

中将にあはせてし哉と思心あり、

かりしありきけるにいきあひて、

みちにてむまのくちをとりて、かうかう

なむ思ふといひければ、あはれかりて

きてねにけり、さてのち、おとこ見

えさりければ、女、おとこの家にいき

てかいまみけるを、おとこほのかに

見て、

114

もゝとせにひとゝせたらぬつくもかみ
我をこふらしおもかけに見ゆ

とていてたつけしきを見て、むはら
からたちにかゝりて、家にきてうちふせり、

おとこ、かの女のせしやうに、しのひて
たてりて見れば、女なけきてぬとて、

115

上句

古今

さむしろに衣かたしきこよひもや

こひしき人にあはてのみねむ

とよみけるを、おとこあはれと思て

その夜はねにけり、世中のれいとし

て、おもふをはおもひ、おもはぬをはお

もはぬ物を、この人は、おもふをも

おもはぬをも、けちめ見せぬ心なん

ありける、

〔六四段〕

男女イ

昔、おとこ、みそかにかたらふわさも

せざりければ、いつくなりけん、あやし

さによめる、

116

吹風にわか身をなさは玉すたれ

ひまもとめつゝいるへきものを

返し、

117

とりとめぬ風にはありとも玉すたれ

たかゆるさはかひまもとむへき

〔六五段〕

むかし、おほやけおほしてつかう

たまふ女の、色ゆるされたるありけり、

おほみやすん所とていますかりける

いとこなりけり、殿上にさふらひける

在原なりけるおとこの、またいとわかゝり

けるを、この女あひしりたりけり、おとこ、

女かたゆるされたりければ、女のある所に

きてむかひをりければ、女、いとかたは

なり、身もほろひなん、かくなせそと

いひければ、

思ふにはしのふることそまけにける

あふにしかへはさもあらはあれ

といひて、さうしにおりたまへれば、

れいのこの

みさつしには、人の見るをもしらて

のほりるければ、この女、思ひわひてさ

とへゆく、されは、なにのよきことゝ思て

いきかよひければ、みな人きゝてわ

らひけり、つとめてとのもつかさの見る

に、くつはとりて、おくになけいれて

のほりぬ、かくかたはにしつゝありわ

たるに、身もいたつらになりぬへければ、

つるにほろひぬへしとて、このお

とこ、いかにせん、わかかゝる心やめたまへと、

ほとけ神にも申けれど、いやまさり

にのみおほえつゝ、猶わりなくこひ

しうのみおほえければ、おむやうし、

かむなきよひて、こひせしといふはら

へのくしてなむいきける、はらへける

まゝに、いとゝかなしきことかすまさり

て、ありしよりけにこひしくのみ

おほえければ、

119

古今

無作者

こひせしとみたらし河にせしみそき

神はつけすもなりにけるかな

といひてなんいにける、

このみかとは、かほかたちよくおはしまし

て、ほとけの御名を御心にいれて、御こ

ゑはいとたうとくて申たまふをきゝて、

女はいたうなきけり、かゝるきみにつ

かうまつらて、すくせつたなくかなし

きこと、このおとこにほたされてとて

なんなきける、かゝるほどに、みかと

きこしめしつけて、このおとこをは

なかしつかはしてければ、この女の

いとこのみやすところ、

女をはまかてさせて、くらにこめて
しおりたまふければ、くらにこも
りてなく、

120

古今

典侍

直子

あまのかるもにすむゝしの我からと
ねをこそなかめ世をはうらみし

となぎをれば、このおとこ、人のくに
より夜ことにぎつゝ、ふえをいと
おもしろくふきて、こゑはおかし
うてそあはれにうたひける、かゝ
れば、この女はくらにこもりながら、

それにそあなるとはきけと、あひ
見るへきにもあらてなんありける、

121

さりともと思覧こそかなしけれ

あるにもあらぬ身をしらすして

とおもひをり、おとこは女しあ
はねは、かくしありきつゝ、人のくにゝ
ありきてかくつたふ、

122

古今

無作者

いたつらに行てはきぬる物ゆへに

見まくほしさにいさなはれつゝ

水のおの御時なるへし、おほみやすん

所もそめとのゝ后也、五条の后とも、

清和天皇、鷹犬之遊漁獵之娯、未嘗留意、

風姿甚端嚴如神性

〔二六六段〕

むかし、おとこ、つのかくにゝしる所あり
けるに、あにおとゝ友たちひきあて、
なにはの方にいきけり、なきさ
を見れば、ふねとものあるを見て、

123

後撰

なにはつをけきこそみつのうひにやと

これやこの世をつみわたるふね

これをあはれかりて、人人かへりにけり、

〔六七段〕

むかし、おとこ、せうえつしに、思ふとち
かいつらねて、いつみのくにへきさら
き許にいきけり、河内のくにいこま
の山を見れば、くもりみはれみ、
たちあるくもやます、あしたよ
りくもりてひるはれたり、ゆきいと
しろつ木のすゑにふりたり、
それを見て、かのゆく人のなかに、たゝ
ひとりよみける、

124

きのふけふくものたちまひかくるふは

花のはやしをうしとなりけり

〔六八段〕

昔、おとこ、いつみのくにへいきけり、すみ
よしのこほり、すみよしのさと、すみ
吉のはまをゆくに、いとおもしろ
ければ、おりみつゝゆく、ある人、すみ
よしのはまとよめといふ、

125

鴈なきて菊の花さく秋はあれと

春のうみへにすみよしのはま

とよめりければ、みな人人よます

なりにけり、

〔六九段〕

むかし、おとこ有けり、そのおとこ、伊
勢のくにゝかりの使にいきけるに、
かの伊勢の斎宮なりける人のおや、
つねのつかひよりは、この人よくいた
はれといひやれりければ、おやのこと
なりければ、いとねむころにいたはり
けり、あしたにはかりにいたしたてゝ
やり、ゆふさはかへりつゝ、そこにこき
せけり、かくてねむころにいたつき
けり、二日といふ夜、おとこ、われて

イ無

あはむといふ、女もはたいとあはし
ともおもへらす、されど、人めしけゝれは

えあはず、つかひさねとある人な
れは、とをくもやとさす、女のねやちか
くありければ、女、ひとをしつめて、
ねひとつ許に、おとこのもとにきたり
けり、おとこはたねられざりければ、
とのかたを見いたしてふせるに、月
のおほるなるに、ちひさきわらは
をさきにたてゝ、人たてり、おとこ、

いとつれしくて、わかぬる所にゐていり
て、ねひとつよりうしみつまであるに、
またなにことゝもかたらはぬにかへり
にけり、おとこ、いとかなしくて、ねす
なりにけり、つとめて、いふかしけれと、
わか人をやるへきにしあらねは、
いと心もとなくてまぢをれは、あけ
はなれてしはしあるに、女のもと
より、ことはゝなくて、

126

古今

きみやこし我やゆきけむおもほえず

夢かうつゝかねてかさめてか

おとこ、いといたうなきてよめる、

127

古今

かきくらす心のやみにまとひにき

一説よひ

ゆめうつゝとはこよひさためよ

とよみてやりて、かりにいてぬ、野に
ありけと心はそらにて、こよひた
に入しつめて、いとゝくあはむと思
に、くにかみ、いつきの宮のかみか
けたる、かりのつかひありときゝて、
夜ひとよさけのみしければ、

もはらあひこともえせて、あけは
おはりのくにへたちなむとすれは、
をとこも人しれすちのなみたを
なかせと、えあはず、夜やうやうあけ
なむとするほどに、女かたより
いたすさかつきのさらに、哥をかきて
いたしたり、とりてみれば、

128

上

かち人のわたれとぬれぬえにしあれば
とかきて、すゑはなし、そのさかつき
のさらに、ついまつのすみして、うたの

すゑをかきつく、

128

下

又あふさかのせきはこえなん

とて、あくれはおはりのくにへこえにけり

斎宮は水のおの御時、文徳天皇の

御むすめ、これたかのみこのいもつと、

恬子内親王

〔七〇段〕

むかし、おとこ、狩の使よりかへりき

けるに、おほよとのわたりにやと

りて、つじきの宮のわらはへにいひ

かけたる、

129

新古今

みるめかる方やいつこそさほさして

我にをしへよあまのつり舟

〔七一段〕

昔、おとこ、伊勢の斎宮に、内の御

つかひにてまいれりければ、かの

宮にすぎこといひける女、わたく

しことなり、

130

拾遺

人丸

ちはやふる神のいかきもこえぬへし

大宮人の見まくほしさに

おとこ、

131

こひしくはきても見よかしちはやふる

神のいさむるみちならなくに

〔七二段〕

むかし、おとこ、伊勢のくになりける

女、又えあはて、となりのくにへいく

とて、いみじうらみければ、女、

132

新古今

おほよとの松はつらくもあらなくに
うらみてのみもかへるなみ哉

〔七三段〕

むかし、そこにはありときけと、せ
うそこをたにいふへくもあらぬ
女のあたりをおもひける、

133

万葉

めには見てくにはとられぬ月のうちの

かじらのこときゝみにそありける

〔七四段〕

むかし、おとこ、女をいたうくらみて、

134

万葉

拾遺

は入たてねとイ

いはねふみかさなる山にあらねとも

あはぬ日おほくこひわたる哉

〔七五段〕

昔、おとこ、伊勢のくにゐていきて

あらむといひければ、女、

135

おほよどのはまにおふてふ見るからに

心はなきぬかたらはねとも

とこひて、ましてつれなかりければ、おとこ

136

袖ぬれてあまのかりほすわたつうみの

見るをあふにてやまむとやする

女、

137

いはまよりおふるみるめしつれなくは

しほひしほみちかひもありなん

又、おとこ、

138

なみたにそぬれつゝしほる世の人の

つらき心はそてのしつくか

世にあふことかたき女になん、

〔七六段〕

むかし、二条の後のまた春宮の
みやすん所と申ける時、氏神に

まつて給けるに、この糸のつかさにさ
ふらひけるおきな、人人のろく
たまはるついでに、御くるまより
たまはりて、よみてたてまつりける、

139

古今

大原やをしほの山もけふこそは
神世のことも思いつらめ

とて、心にもかなしと思ひけん、
いかゞ思ひけん、しらすかし、

〔七七段〕

文徳天皇

むかし、たむらのみかたとと申すみか
とおはしましけり、その時の女御、

たかきこと申すみまそかりけり、
それうせたまひて、安祥寺にてみ
わさしけり、人人さゝけものたてま
つりけりたてまつりあつめたる
物、ちさゝけ許あり、そこはくのさゝ
けものを木のえたにつけて、たうの
まへにたてたれば、山もさらにた
うのまへにうこきいてたるやうに
なん見えける、それを右大將に
いまそかりけるふちはらのつね

ゆきと申すいまそかりて、かうのを
はるほどに、うたよむ人人をめし
あつめて、けふのみわさを題にて、
春の心はえあるうたゝてまつらせ
たまふ、右のむまのかみなりける
おきな、めはたかひなからよみ
ける、

140

山のみなうつりてけふにあふ事は
はるのわかれをとふとなるへし

とよみたりけるを、いま見れば、よくも
あらざりけり、そのかみはこれや
まさりけむ、あはれかりけり、

女御從四位下藤多賀幾子、右大臣良相女、

嘉祥三年女御、天安二年十一月十四日卒、

安祥寺、五条后順子建立寺也

西三条

右大臣

良相一男

常行、貞觀六年正月十六日參議、八年十二月

十六日右大将、一、業平、貞觀七年三月右馬頭、

天安卒、女御法事如何、若後追善

〔七八段〕

むかし、たかきこと申す女御おは

しましけり、うせ給て、なゝ七日の

みわさ安祥寺にてしけり、

右大将ふちはらのつねゆきといふ

人いまそかりけり、そのみわさにま

うてたまひて、かへさに、山しなの

禪師

せんしのみこおはします、その山

しなの宮に、たきおとし、水はし

らせなとして、おもしろくつくられ

たるにまうてたまうて、とどころよ

そにはつかうまつれと、ちかくはいまた

つかうまつらす、こよひはこゝにさ

ふらはむと申たまふ、みこよろこひたまふて、

よるのおましのまうけさせ給、

さね

人康親王、仁明第四、四品彈正尹、号山科宮、

貞觀元年五月入道、同十四年薨、四十二

さるにかの大将、いてゝたはかり

たまふやう、みやつかへのはしめに、

たゝなをやはあるへき、三条のお

ほみゆきせし時、きのくにの千里

のはまにありける、いとおもしろき

いしたてまつれりき、おほみゆきの

貞觀八年三月廿三日、行幸右大臣良相百花亭

のちたてまつれりしかは、ある人

のみさうしのまへのみそにすへ

たりしを、しまこのみ給きみ也、

このいしをたてまつらんとのたまひ

て、みすいしん、とねりしてとりに

つかはず、いくはくもなくてもてき
ぬ、このいし、きくしよりは見るは
まされり、これをたゞにたてまつらは
すゝるなるへしとて、人人にうたよ

右大将依佐監右馬頭相伴 他本

ませたまふ、みきのむまのかみ

なりける人のをなむ、あおきこけ
をきさみて、まき糸のかたにこのつたを
つけてたてまつりける、

141

あかねともいはにそかふる色見えぬ
心を見せむよしのなけれは
となむよめりける、

〔七九段〕

むかし、うちのなかにみこうまれ
給へりけり、御つふやにひとひと哥
よみけり、御おほちかたなりける
おきなによめる、

142

わかゝとにちひろある影をうへつれば
夏冬たれかゝくれさるへき

これはさたかすのみこ、時の人、中將の
子となんいひける、あにの中納言ゆきひらの

貞数親王

清和第八、母中納言行平女

延喜十三年薨、四十二

むすめのはらなり

〔八〇段〕

昔、おとろへたる家に、ふちの花つ
へたる人ありけり、やよひのつ
こもりに、その日あめそほふるに、
人のもとへおりてたてまつらすとてよめる、

143

古今

ぬれつゝそしみておりつる年の内に
はるはいくかもあらしとおもへは

源融、嵯峨第十二源氏、母正五位下大原全子、

貞観十四年八月廿五日任左大臣、元大納言、五十一、

仁和三年従一位、寛平元年輦車、七年八月薨七十三

〔八一一段〕

むかし、左のおほいまうちきみいま
そかりけり、かも河のほとりに、六条
わたりに、家をいとおもしろくつ
くりてすみたまひけり、神な月の
つこもりかた、きくの花つつろひさ
かりなるに、もみちのちくさに見

ゆるおり、みこたちおはしまさせて、
夜ひとよさけのみしあそひて、

よあけもてゆくほとに、このとゝ
おもしろきをほむるうたよむ、そ

いた

こにありけるかたるをきな、たい
しきのしたにはひありきて、人に
みなよませはてゝよめる、

144

しほかまにいつかきにけむあさなきに
つりするふねはこゝによらなん

となむよみけるは、みちのくにゝいき
たりけるに、あやしくおもしろき所所
おほかりけり、わかみかと六十よこく
の中に、しほかまといふ所ににたる
ところなかりけり、されはなむ、かの
おきなさらにこゝをめてゝ、しほ

しほかまにいつかきにけむと
よめりける、

名虎女

惟喬文徳第一、母従五位上紀静子、四品、号小野宮

〔八一段〕

むかし、これたかのみこと申すみこ

おはしましけり、山さきのあなたに、
みなせといふ所に宮ありけり、年
ことのさくらの花さかりには、その
宮へなむおはしましける、その時、
右のむまのかみなりける人を、つねに
ゐておはしましけり、時世へてひさ
しくなりにければ、その人の名わ
すれにけり、かりはねむころに
もせて、さけをのみのみつゝ、やまと

うたにかゝれりけり、いまかりする
かたのゝなきさの家、そのゐんの
さくらごとにおもしろし、その木の
もとにおりゐて、枝をゝりてかさし
にさして、かみなかしもみな哥よみ
けり、うまのかみなりける人のよめる、

145

古今

世中にたえてさくらのなかりせは
はるの心はのとけからまし
となむよみたりける、又人のうた、

146

ちれはこそいとゝさくらはめてたけれ
うき世になにかひさしかるへき
とて、その木のもとはたちてかへるに、
曰くれになりぬ、御ともなる人、さ
けをもたせて野よりいてきたり、
このさけをのみてむとて、よき所を
もとめゆくに、あまの河といふところ
にいたりぬ、みこにむまのかみおほ
みきまいる、みこのゝたまひける、

かた野をかりて、あまの河のほとりにい
たるを題にて、うたよみてさか月
はさせとのたまうければ、かのみま
のかみよみてたてまつりける、

147

古今

かりくらしなはたつめにやとからむ
あまのかはらに我はきにけり
みこ、うたを返ゝすしたまうて、返
しえしたまはず、きのありつね御
ともにつかうまつれり、それが返し

148

古今

ひとゝせにひとたひきます君までは

やとかす人もあらしとぞ思
かへりて宮にいらせ給ぬ、夜ふくるま
てさけのみ物かたりして、あるしの
みこ、爰ひていりたまひなむとす、
十一日の月もかくれなむとすれば、かの

むまのかみのよめる、

149

古今

あかなくにまたきも月のかくるゝか

山の葉にけていれすもあらなん

みこにかはりたてまつりて、きのありつね、

150

後撰

上野岑雄

をしなへて峰もたひらになりなゝむ

山のはなくは月もいらしを

〔八三段〕

むかし、みなせにかよひ給しこれたかの

みこ、れいのかりしにおはしますとも、

うまのかみなるおきなつかうまつれり、

日こるへて宮にかへりたまうけり、

御をくりしてとくいなんとおもふに、

おほみきたまひろくたまはむとて、

女イ

つかはさゝりけり、このむまのかみ心

もとなかりて、

151

まくらとて草ひきむすぶこともせし

秋の夜とたにたのまれなくに

とよみける、時はやよひのつこもりなりけり、

みこおほとのもらてあかし給てけり、

貞観十四年七月出家

かくじつゝまつてつかうまつりけるを、

おもひのほか、御くしおろしたまつて

けり、む月におかみたてまつらむとて、

小野にまつてたるに、ひえの山のふ

もとなれは、雪いとたかし、しゐて

みむるにまつてゝおかみたてまつるに、

つれつれといと物かなしくておは

しましければ、

ちゝひさしくさぶらひて、いにしへの

ことなと思ひいてきこえけり、さても

さぶらひてしかなとおも入と、おほ

やけことゝもありければ、えさぶらはて

ゆぶくれにかへるとて、

わすれては夢かと思おもひきや
ゆきふみわけて君を見むとは
とてなむ、なくなきける、

〔八四段〕

むかし、おとこ有けり、身はいやしなから、
はゝなん宮なりける、そのはゝ、

なかをかといふ所にすみ給けり、
こは京に宮つかへしければ、まうつ
としけれど、しはしはえまうてす、
ひとつこにさへありければ、いとかな
しうし給ひけり、さるに、しはず
はかりに、とみのことゝて御ふみあり、
おとるきて見れば、うたあり

老ぬれはさらぬわかれのありといへは
いよいよ見まくほしきゝみかな

伊登内親王、貞観三年九月薨

かのこ、いたつゝちなきてよめる、

世中にさらぬわかれのなくも哉
千よもといのる人のこのため

〔八五段〕

昔、おとこ有けり、わらはよりつかう
まつりけるきみ、御くしおろしたまうて
けり、む月にはかならずまうてけり、
おほやけのみやつかへしければ、つね
にはえまうてす、されと、もとの心う
しなはてまうてけるになん有ける、
むかしつかうまつりし人、そくなる、

せんしなる、あまたまいりあつまりて、
む月なれは事たつとて、おほみき
たまひけり、ゆきこほすかことふりて、
ひねもすにやます、みな人系ひて、
雪にふりこめられたりといふを
たいにて、うたありけり、

古今

行哥上句

おもへとも身をしわけねはめかれせぬ
ゆきのつもるそわか心なる
とよめりければ、みこいといたうあはれかり

たまつて、御そぬきてたまへりけり、

〔八六段〕

昔、いとわかきおとこ、わかき女をあひ
いへりけり、をのをのおやありければ、つゞみ
ていひさしてやみにけり、年ころへて、
女のもとに、猶心さしはたさむとや思
けむ、おとこ、うたをよみてやれりけり、

156

新古今

今まてにわすれぬ人は世にもあらし
をのかさまさま年のへぬれは
とてやみにけり、おとこも女も、あひは

なれぬ宮つかへになんいてにける、

〔八七段〕

むかし、おとこ、津のくにむはらのこほり、
あしちのさとにけるよしとて、いきて
すみけり、むかしのうたに、

157

新古今

あしのちのなたのしほやきいとまなみ
うけのをくしもさくすきにけり
とちみけるぞ、このさとをよみける、
こゝをなむあしちのなたとはいひ
ける、このおとこなまみちつかへしければ、

ふい

それをたよりにて、あつうのすけとも
あつまりきにけり、このおとこのこの
かみも糸ふのかみなりけり、その家
のまへの海のほとりにあそひありき
て、いさ、この山のかみにありといひ
ぬのひぎのたき見たのほらんといひ
て、のほりて見るに、そのたき物より
こと也、なかさ二十丈ひろさ五丈許
なるいしのおもて、しらきぬて

いはをつゝめらんやうになむあり
ける、さるたきのかみに、わらうたの
おほきさして、さしいてたるいしあり、
そのいしのうへにはしりかゝる水は、
せうかうし、くりのおほきさにてこほれ
おつ、そこなる人にみなたきの哥
よまず、かのゑふのかみまつよむ、

158

新古今

わか世をはけふかあすかとまつかひの
なみたのたきといつれたかけん

あるし、つきによむ、

159

ぬきみたる人こそあるらし白玉の
まなくもちるかそてのせはきに
とよめりければ、かたへの人、わらふ
ことにや有けん、この哥にめてゝやみにけり、
かへりくるみちとをくて、うせにし宮内
卿もちよしか家のまへくるに、日
くれぬ、やとりの方を見やれば、あまの
するゝ
いさり火おほく見ゆるに、かのあるし
のおとこよむ、

160

新古今

はるゝ夜のほしか河辺の蛸かも
にイ

わかすむかたのあまのたく火か
とよみて、家にかへりきぬ、その夜、
南の風ふきて浪いとたかし、つとめて、
その家のめのこともいてゝ、うきみるの
なみによせられたるひろひて、いゑの内に
もてきぬ、女かたより、そのみるをたかつ
きにもりて、かしはをおほひて
いたしたる、かしはにかけり、

161

渡つ海のかさしにさすといはふもゝ

きみかためにはおしまさりけり
あなか人のうたにては、あまれりや
たらすや、

〔八八段〕

昔、いとわかきにはあらぬ、これかれとも
たちともあつまりて、月を見てそれ
かなかにひとり、

162

古今

おほかたは月をもめてしこれその
つもれは人のおいとなる物

〔八九段〕

むかし、いやしからぬおとこ、我よりは
まさりたる人を思かけて、年へける

163

か らめい

ひとしれす我こひしなはあちきなく
いつれの神になきなおほせん

〔九〇段〕

むかし、つれなき人をいかでと思わたり
ければ、あはれと思けん、さらはあす
ものこしにてもといへりけるを、か
きりなくうれしく、又うたかはし
かりければ、おもしろかりけるさくら
につけて、

164

らめい

さくら花けふこそかくもにほふとも
あなたのみかたあすのよのこと

といふ心はへもあるへし、

〔九一段〕

むかし月日のゆくをさへなけくお
とこ、三月つこもりかたに、

165

後撰

おしめとも春のかきりのけふの日の
ゆふくれにさへなりにける哉

〔九二段〕

むかし、こひしさにきつゝかへれと、
女にせうそこをたにえせてよめる、

166

あしへこくたなゝしを舟いくそたひ
ゆきかへるらんしる人もなみ

〔九三段〕

むかし、おとこ、身はいやしくて、いとになき

人を思かけたりけり、すこしたのみ
ぬへきさまにやありけん、ふして思ひ、
おきておもひ、思わひてよめる、

167

ウ

あふなあふな思ひはすへしなそへなく
たかきいやしきくるしかりけり

むかしもかゝることは、世のことはりにや

ありけん、

〔九四段〕

むかし、おとこ有けり、いかゝありけむ、
そのおとこすますなりにけり、
のちにをとこありけれと、こあるなか

なりければ、

こまかにこそあらねと、時時ものいひ
をこそせけり、女かたに、氣かく人なり
ければ、かきにやれりけるを、いまの
おとこの物すとて、ひとひふつかをこ
せざりけり、かのおとこいとつらく、
をのかきこゆる事をは、いまゝてたま

猶

はねは、ことはりとおもへと、人をはう
らみつへき物になんありけるとて、
るうしてよみてやれりける時、は
秋になんありける、

168

秋の夜は春ひわするゝ物なれや
かすみにきりやちへまざるらん
となんよめりける、女返し、

169

千々の秋ひとつの春にむかはめや
もみちも花もともこそちれ

〔九五段〕

むかし、二条の后につかつまつるおとこ
有けり、女のつかうまつるをつねに
見かはして、よはひわたりけり、いか
て物こしにたいめんして、おほつかなく

思つめたること、すこしはるかさん

といひければ、女いとしのひて、ものこ
しにあひにけり、物かたりなとして、おとこ
170

ひこほしにこひはまさりぬあまの河
へたつるせきをいまはやめてよ

このつたにめてゝあひにけり、

〔九六段〕

むかし、おとこ有けり、女をとかくいふこと
月日へにけり、いは木にしあらねは、
心くるしと思けん、やうやうあはれと
思けり、そのころみな月のもちばかり

なりければ、女、身にかさひとつふた
ついてきにけり、女いひをこせたる、
今はなにの心もなし、身にかさも
ひとつふたついてたり、時もいとあつ
し、すこし秋風ふきたちなん時、

た

かならずあはむといへりけり、秋まつ
ころをひに、こゝかしこより、その人の
もとへいなむすなりとて、くちい

このイ

てきにけり、さりければ、女のせつと、にはかに

むかへにきたり、されはこの女、かえての
はつもみちをひろはせて、うたを
よみて、かきつけてをこせたり、

171

秋かけていひしなからもあらなくに

この葉ふりしくえにこそありけれ

とかきをきて、かしこより人をこせは、
これをやれとていぬ、さてやかてのち、
つるにけふまでしらす、よくてやあ
らむ、あしくてやあらん、いにし所もしらす、

かのおとこは、あまのさかてをうち
てなむのろひをるなる、むくつけ
きこと、人のゝろひことはおふ物にや
あらむ、おはぬ物にやあらん、いまこそ
は見めとそいふなる、

〔九七段〕

昭宣公墓終、貞観十四年八月廿一日右大臣、左大将
むかし、ほり河の、おほいまうちきみ

と申すいまそかりけり、四十の賀、

貞観十七年

九条の家にてせられける日、中将
なりけるおきな、業平 十九年任中将、不審

172

古今

さくら花ちりかひくもれおいらくの
こむといふなるみちまかふかに

〔九八段〕

忠仁公 天安元年二月十九日太政大臣 五十五 四月九日従一位、

二年十一月攝政、清和外祖

昔、おほきおほいまうちきみときこ
ゆるおはしけり、つかうまつるおとこ、
なか月許に、むめのつくりえたに
きしをつけてたてまつるとて、

173

古今

太政大臣

哥下云

わかたのむ君かためにとおる花は
ときしもわかぬ物にそ有ける
とよみてたてまつりたりければ、いと

かしこくおかしかり給て、使にろくたま

へりけり、

〔九九段〕

業平、貞観六年三月右少将、七年右馬頭、十九年正月左中将

むかし、右近の馬場のひをりの日、
むかひにたてたりけるくるまに、女の
かほのしたすたれよりほのかに見
えければ、中将なりけるおとこの
よみてやりける、

174

古今

見すもあらず見もせぬ人のこひしくは
あやなくけふやなかめくらさん

返し、

175

古今

しるしらぬなにかあやなくわきて
いはん

おもひのみこそしるへなりけれ

のちはたれとしりにけり、

〔一〇〇段〕

むかし、おとこ、後涼殿のはさまをわたりければ、あるやむことなき人の御つほねより、わすれくさをしのぶくさとやいふとて、いたさせたまへりければ、たまはりて、

176

忘草おふるのへとは見るらめと

こはしのふなりのちもたのまん

〔一〇一段〕

むかし、左兵衛督なりける在原の

ゆきひらといふありけり、その人の家によぎさけありときくと、うへにありける左中弁ふちはらのまさちかといふをなむ、まらうとさねにて、その

藤原良近、貞観十二年正月右中弁、十六年秋左中弁

日はあるしまうけしたりける

なさけある人にて、かめに花を

させり、その花のなかにあやしき

ふちの花ありけり、花のしなひ

三尺六寸はかりなむありける、

それをたいにてよむ、よみはてかたに、

あるしのはらからなる、あるしゝ

たまふときときたりければ、とら

へてよませける、もとよりうたのことは

しらすりければ、すまひけれと、しみて

よませければ、かくなん、

177

おい

さく花のしたにかくるゝ人をほみ

ありしにまさるふちのかけかも

などかくしもよむといひければ、お

ほきおとくのゑい花のさかりにみま

そかりて、藤氏のことにはさかゆるを

おもひてよめるとなんいひける、み

なひと、そしらすなりにけり、

〔一〇二段〕

むかし、おとこ有けり、うたはよまさり

けれど、世中を思しりたりけり、
あてなる女のおまになりて、世中を
思つんして、京にもあらず、はるか
なる山さとにすみけり、もとし
そくなりければ、よみてやりける、

178

そむくとして雲にはのらぬ物なれと

世のつきことそよそになるてふ
となんいひやりける、齋宮の宮也、

〔一〇三段〕

むかし、おとこ有けり、いとまめにしち
ようにて、あたなる心なかりけり、ふか
草のみかとなむつかうまつりける、心
あやまりやしたりけむ、みこたちのつか
ひたまひける人をあひいへりけり、さて、

179

古今

ねぬる夜の夢をはかなみまとるめは

いやはかなにもなりまさる哉

となんよみてやりける、さるうたの
きたなけさよ、

〔一〇四段〕

むかし、ことなることなくてあまに

なれる人有けり、かたちをやつした
れと、物やゆかしかりけむ、かものまつり
見にいてたりけるを、おとこ、うたによみて
やる、

180

世をうみのあまとし人を見るからに

めくはせよともたのまるゝ哉

これは齋宮の物見たまひけるくる
まに、かくきこえたりければ、見さし
てかへり給にけりとなん、

〔一〇五段〕

むかし、おとこ、かくてはしぬへしといひ
やりたりければ、女、

181

白露はけなはけなゝんきえすとて

たまにぬくへき人もあらしを

といへりければ、いとなめしと思けれど、
心さしはいちまさりけり、

〔一〇六段〕

昔、おとこ、みこたちのせうえつし
給所にまうてゝたつた河のほとりにて、

182

古今

ちはやふる神世もきかすたつた河
からくれなるに水くゝるとは

〔一〇七段〕

むかし、あてなるおとこありけり、その
おとこのもとなりける人を、内記に

有けるふちはらのとしゆきといふ人

敏行、母紀名虎女

よはひけり、されと わかければ、ふみも

また

おさおさしからず、ことはもいひしらす、
いはむやうたはよまさりければ、

こい

かのあるしなる人、あんをかきて

かゝせてやりけり、めてまとひにけり、

さておとこのよめる、

183

古今

つれつれのなかめにまさる涙河

そでのみひちてあふよしもなし

返し、れいのおとこ、女にかはりて、

184

古今

あさみこそゝてはひつらめ涙河

身さへなかるるときかはたのまむ

といへりければ、おとこいといたつめてゝ、

いまゝてまきて、ふはこにいれてありと

なんいふなる、おとこ、ふみおこせたり、

えてのちの事なりけり、あめのふり

ぬへきになん見わつらひ侍、みさい

はひあらは、このあめはふらしといへ

りければ、れいのおとこ、女にかはりて

よみてぢらす、

185

古今

かすかすに思ひおもはすとひかたみ

身をしる雨はふりそまされる
とよみてやれりければ、みのもかさ
もとりあへて、しとくにぬれてまどひ
きにけり、

〔一〇八段〕

むかし、女、ひとの心をうつらみて、

186

風ふけはとはに涙こそいはなれや

わか衣手のかはく時なき

とつねのことくさにいひけるを、きゝ

おひけるおとじ、

187

夜ることにかはつのおまたなくたには

水こそまされ雨はふらねと

〔一〇九段〕

むかし、おとこ、ともたちの人をつし

なへるかもとにやりける、

188

古今

友則

花よりも人こそあたになりにけれ

いつれをさきにこひんとか見し

〔一一〇段〕

むかし、おとこ、みそかにかよふ女ありけり、

それかもとより、こよひゆめになん

見えたまひつるといへりければ、おとこ、

189

おもひあまりいてにしたまのあるならん

夜ふかく見えはたまむすひせよ

〔一一一段〕

昔、おとこ、やむことなき女のもとに、な

くなりけるをとぶらぶちうにて

いひやりける、

190

いにしへはありもやしけん今そしる

また見ぬ人をこふるものとは

返し、

191

後撰

したひものしるしとするもとけなくに

かたるかことはこひすそあるべき

又、返し

192

後撰

こひしとはさらにもいはしゝたひもの
とけむを人はそれとしらなん

【一一二段】

りけ

むかし、おとこ、ねむころにいひちきれる女の、
こゝろ
なま

なりにければ、

193

古今

すまのあまのしほやく煙風をいたみ
おもはぬ方にたなひきにけり

【一一三段】

昔、おとこ、やもめでゐり、

194

なかゝらぬいのちのほどにわするゝは
いかにみしかき心なるらん

【一一四段】

或本不可有之云々 多本皆載之不可止

むかし、仁和のみかと、せり河に行幸
したまひける時、いまはなること
にけなく思けれど、もとつきにける
事なれば、おほたかのたかゝひにて

さふらはせたまひける、すりかりきぬ
のたもとにかきつけゝる、

195

後撰

おきなさひ人とかめそかり衣
けふばかりとそたつもなくなる

おほやけの御けしきあしかりけり、
をのかよはひを思けれど、わかゝらぬ
人はきゝおひけりとや、

【一一五段】

むかし、みちのくににて、おとこ女すみ
けり、おとこ、宮こいなんといふ、この女
いとかなしうて、うまのはなむけを

てい無

たにせむとて、おきのあて、みぢこ

しまといふ所にて、さけのませてよめる、

196

古今

滅哥

をきのるて身をやくよりもかなしきは
宮こしまへのわかれなりけり

〔一一六段〕

むかし、おとこ、すするにみちのくに
まてまとひにけり、京におもふ
人にいひやる

197

拾遺

万葉

ひさぎ

浪まより見ゆるこしまのはまひさし
ひさしくなりぬきみにあひ見て
なにことも、みなよくなりけり

となんいひやりける、

〔一一七段〕

むかし、みかと、住吉に行幸したま
ひけり、

198

古今

無作者

我見てもひさしくなりぬ住吉の
きしのひめ松いくよへぬらん
おほん神けきやうし給て、

199

新古今

むつまじと君は白浪みつかきの
ひさしき世よりはひそめてき

〔一一八段〕

昔、おとこ、ひさしくをともせて、わ
するゝ心もなし、まいりこむといへりければ、

200

古今

無作者

玉かつらはふ木あまたになりぬれば
たえぬ心のうれしけもなし

〔一一九段〕

むかし、女の、あたるおとこのかたみ

とてをきある物ともを見て、

201

古今

無作者

かたみこそ今はあたねれこれなくは
わするゝ時もあらましものを

〔二一〇段〕

昔、おとこ、女のまた世へすとおほえ
たるか、人の御もとにしひて
ものきこえてのち、ほとへて

202

拾遺

無作者

近江なるつくまのまつりとくせなん
つれなき人のなへのかす見む

〔二一二段〕

むかし、おとこ、梅壺より雨にぬれて、
人のまかりいつるを見て、

203

うくひすの花をぬふてふかさも哉
ぬるめる人にきせてかへさん

返し、

204

うくひすの花をぬふてふかさはいな
おもひをつけよほしてかへさん

〔二二三段〕

むかし、おとこ、ちきれることあやまれる
人に、

205

新古今

山しろのゐてのたま水てにむすひ
たのみしかひもなきよなりけり
といひやれど、いらへもせず、

〔二二三段〕

むかし、おとこありけり、深草にすみ
ける女を、やうやうあきかたにや
思けん、かゝるうたをよみけり、

206

古今

年を入てすみこしさとをいてゝいなは

いとゞ深草野とやなりなん

女、返し、

207

古今

野とならばうつらとなりてなきをらん

かりにたにやは君はこそらむ

とよめりけるにめてゞ、ゆかむと

思ふ心なくなりにけり、

〔一二四段〕

むかし、おとこ、いかなりける事を

思ひけるおりにかよめる、

208

おもふこといはてそたゞにやみぬへき

我とひとしき人しなけれは

〔一二五段〕

むかし、おとこ、わつらひて、心地

しぬへくおほえけれは、

209

古今

つゐにゆくみちとはかねて

きゝしかときのふけふとは

おもはさりしを

平城天皇三子

業平朝臣 三品弹正尹阿保親王五男

従三位乙叡女

母伊登内親王、桓武第八皇女、母藤南子

年 月 日 任左近将監

承和十四年正月補藏人、嘉祥二年正月七日従

五位下、貞観四年正月七日従五位上、五年

二月十日左兵衛権佐、六年三月八日右近少将、

七年三月九日右馬権頭、十一年正月七日正五位下、

十五年正月七日従四位下、元慶元年正月十五日

左近権中将、十一月廿一日従四位上、

二年正月十一日相模権守、三年十月藏人頭、

四年正月十一日美濃権守、同廿八日卒、

親王 平城第三、母正五位下蕃良藤継女

承和九年十月薨、贈一品

行平卿 阿保親王一男

天長三年仲平、行平、守平、業平、賜姓在原朝臣、

承和七年正月藏人、十二月辞退、廿日従五下 廿四、十年二月

侍從、十三年正月從五上、任左兵衛佐、五月右近少將、
仁壽三年正五下、齊衡二年正月四位因幡守、四年
兵部大甫、天安二年二月中務大甫、四月左馬頭、三年
正月播磨守、貞觀二年六月内匠頭、八月廿六日左京大
夫、四年正月信乃守、同月從四上、五年二月大藏大甫、

貞觀十二年二月十三日參議 五十三、廿六日左兵衛督

八月廿一日藏人頭

十四年左衛門督、十五年從三位大宰師、

十月十四日別當

元慶元年治部卿、六年正月中納言 六十五、

八年正三位民部卿、仁和元年按察、

仁和三年四月十三日致仕、寬平五年薨、

六年正月十六日備前權守、三月八日兼左兵衛督、

八年正月正四位下、十年五月兼備中守、

紀有常

承和十一年正月十一日右兵衛大尉、嘉祥三年

四月二日左近將監、四月藏人、五月十七日兼

近江權大掾、仁壽三年七月廿六日兼左馬助、

十一月甲子從五位下、二年二月廿八日兼但馬介

三年正月十六日右兵衛佐、四年正月十六日兼讚

岐介、轉左兵衛、齊衡二年正月從五位上、

同十五日左近少將、天安元年九月廿七日兼少納言、

二年二月五日兼肥後權守、

貞觀七年三月九日任刑部權大輔、九年二月十一日

任下野權守、十五年正月七日正五位下、十七年

二月十七日任雅樂頭、十八年正月七日從四位下、

十九年正月廿三日卒、年六十三、

二条后 中納言左衛門督贈太政大臣長良女、母紀伊守總繼女、

貞觀八年十二月女御宣旨、九年正月八日正五位下、

貞觀十年十二月廿六日生第一皇子 廿七

帝御年十九

十一年二月立為皇太子、十三年正月八日從三位、

元慶元年正月三日即位日立為中宮 六

六年正月七日為皇太后宮、

寬平八年九月廿一日停后位、

延喜十年十二月薨、六十九

天慶六年五月追復后位、

貞觀元年十一月廿日從五位下五節舞姬

河原左大臣融 嵯峨第十二源氏

承和五年十一月廿七日正四位下 元服日 六年壬正月

乙酉侍従、八年正月相模守、九年九月己亥

近江守、十五年二月右近中将兼美作守、

嘉祥三年正月七日従三位、五月右衛門督、

仁寿四年八月兼伊勢守、斉衡三年九月任

参議右衛門督伊勢守如元、

なそへなく

万葉集第十八

今夜

ほととぎすこよなきわたれ灯を

つくよになそへそのかけを見む

月夜也 なすらへ也

六帖哥

いにはえにふかくかなしきふえ竹の

よこゑやたれとふ人もなし

宋玉神女賦

素 質幹之 実 号志解泰而体閑

姿艶逸 儀 静 体 閑

曹子建洛神賦

婀娜 儀 静 体 閑

姿艶逸 儀 静 体 閑

みやひ みやひか也といふ詞

其心みやひをかはするといふは

なさけといふ同心事

天福二年正月廿日 己未 申刻、凌桑門

之盲目、連日風雪之中、遂此書写、

為授鍾愛之孫女也、

同廿二日校了、

定家卿自筆或本奥書、明応七年六月写之

合多本所用捨也、可備証本、

近代以狩使事為端之本出来、未代

之人今案也、更不可用之、

此物語古人之説不同、或称在中将之自書、

或称伊勢之筆作、就彼此有書落事等、

上古之人強不可尋其作者、只可翫詞

華言葉而已

戸部尚書（花押）

（伊勢物語 小林茂美校注 東京：新典社、1975年刊、影印校注古典叢書 6 をデータ化したもの）